

薪ができたなら今度はそれをストックしておかなければならない。田舎暮らしの家の軒下に薪を積んであるあれだ。両端に積む薪の高さにあつた支柱を立てそれを支えに薪が崩れないように積むようだ。ところが、最初の年に買った薪を運んできた人たちは、そんな準備をしていない我が家の軒下にいと簡単にヒヨヒヨいと積んでいく。それでは崩れてしまうだろうと思つたが、そこは積み方にちよつとした工夫があつた。両端の薪を積む時にところどころ横向きに薪を積みそれをちよつと内側に傾いたようにセットするのだ。そうすることによつて、両端の薪は内側に転がる力が働いて互いに突つ張り合い崩れることが無いのだ。

翌年、試しに同じ方法で積んでみたが意外と難しい。どうしても両端が積むうちにだんだん内側に傾いてきて美しくない。支柱が無いのに両端がまっすぐ積み上がっているのが美しいので、そうでなければ単に積んだだけに見える。まあ、人に見せるものではないのだが自分的に納得がいかない。横向きに積む薪を少し外側にせり出させるとなんとかそれらしくなつてきた。

次の問題は、どこに積むかだ。冬の便りが届く頃には、薪ストーブの置いてある土間から軒下伝いに行き来できる縁側に積むと便利で、一応、一冬で焚く薪の量を積むことができる。ただ、夏の間とか季節の良い時に縁側が薪に占領されているのはいただけくない。幸い、敷地は広いので積むところはどこにでもあつた。ちよつと食卓の窓から見える木々の一角に積んでみることにした。

都心のマンションのベランダで使つていたすのこ板を下に引いて地面からの湿気が薪を腐らせないように自分なりに考えてみた。そこは野ざらしになるので積んだ薪の上にポリカーボネートの波板を乗せ雨も防ぐことにした。その屋根を固定するのに木の枝を乗せ、縄で下のすのこ板に結びつけた。我ながら立派なものできたと思ひ自賛。食卓の窓から遠くにオブジェのように見えるのも悪く無い。

妻が「それを木熊(きぐま)と呼ぶことがある。」と教えてくれた。木々に囲まれて立つ姿は、熊と言われればそう見えなくもない。それに「薪を積んだ」というよりも「木熊をつんだ」という方がなんとなく様になる。すつかりこの木熊という言い方が気に入つて、まわりの人に言いふらしていた。

そのように調子に乗っていると足を掬われるのが常である。

一年、風雨と雪に晒された木熊は、縄が切れ屋根は飛ばされ、すのこ板の効果などどこえやらという感じで下の薪が腐りかけ、凸凹した地面のままに積んでいたのであちこち崩れてしまった。厳しい自然に耐えた老熊の威厳は、少しも感じられず、単に素人の薪積みの悲しい末路を晒すことになった。

すつかり野のなかでも薪積みに自信を無くし、大人しく縁側とは反対の屋根の下に支柱付きの薪積み台をつくつてそちらに大人しく積むことにした。そんな時に、町内のKさんから「どこかで円形に薪を積んでいるのを見たよ。ああいう積み方もあるんだね。」と言われた。

